倫　　理

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

１　前　　文

本年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）公民科の受験者総数（追・再試験を含む）は325,057人であり、その内訳は、「現代社会」が最多の177,913人（54.7%）、「政治・経済」が88,818人（27.3%）、「倫理」は58,320人（17.9%）であった。本年度は「倫理」については2,388人の増加となった。ここ５年間における受験者数の推移を見ると、「現代社会」「政治・経済」は増減しているが、「倫理」は常に少しずつ増加してきている。来年度より公民科は、従来の「現代社会」「倫理」「政治・経済」に加えて、「倫理、政治・経済」が新設される。そのために大きな変化がもたらされると予想される。

近年、平均点が60点台後半を推移しているのは、決して難易度が平易であるということではない。奇問や悪問が極めて少なく全体としては、標準的な難易度であり、よく工夫されている。そして、単に知識だけではなく思考力や応用力などを問う設問がバランス良く出題されている。そのため、学習に対する努力が結果として報われやすく、多くの受験者が地道に受験対策をしている。そのことが平均点や標準偏差の結果にも反映していると考えられる。

現代の日本社会の現状は、大人も含め主体性・自律性を失いがちで、稚拙な言動をする青年が多く見られがちである。その状況と呼応するように「倫理」の目標としては、人間としての在り方生き方について理解し思索することを通して、主体性や良識ある公民へと成長することがあげられている。センター試験では、こうした目標を受験者がどの程度達成しているかを問う出題がなされ、そして、受験者がこのセンター試験に挑戦したことの経験を通して、人間として成長を促すものであってほしいと考える。そのためには、第一に、基本的な用語の暗記やその理解を問うだけではなく、思考力や判断力、応用力など様々な能力を試す出題であること。第二に、取り扱う倫理的な課題が空理空論ではなく、受験者の実生活と深く関連する題材を取り扱うこと。第三に、設問だけではなくそれ以外のリード文や資料などを受験者が読解することによって、倫理的な課題について熟考させるような工夫や配慮をすることなどが挙げられる。この三点について一層の努力をお願いしたい。この努力が更に倫理の受験者数の増加につながっていくと考えられよう。

以上のことを踏まえて、本年度の試験問題について次の視点から検討及び評価を行った。

⑴　高等学校学習指導要領の目標及び内容に適合しているか。また、それに準拠した教科書や授業内容に即した問題であるか。

⑵　リード文は、メッセージ性を持ったもので、「倫理」を学んだ受験者を啓発するものであるか。

⑶　基礎的・基本的なものから総合的な思考力、判断力、応用力を問うものまでバランス良く出題されているか。

⑷　問題の難易度、出題方法、配点等が適切であり、各分野からバランス良く出題されているか。

２　試験問題の内容・範囲等について

試験問題の内容及び出題範囲については、高等学校学習指導要領において示された二つの大項目「青年期の課題と人間としての在り方生き方」及び「現代と倫理」の分野から、適切に出題されていると考えられる。以下に大問及び設問ごとの範囲や内容、程度等に関する分析を示す。

第１問　「個性と自己理解」について（青年期の課題）

「個性化」を求めながら、仲間などの他者との関係である「社会化」をどう図るかの葛藤から、自己理解を考えさせるリード文である。基本的な知識をもとに、思考力や読解力、判断力を問うよう工夫されている。全体的には標準的な難易度の問題である。

問１　レヴィンらの葛藤の類型についての理解を問う設問である。教科書には「二重接近－回避」の記述はないが、問題文に説明がある上、選択肢の葛藤場面も具体例として組み合わせやすいので、平易である。

問２　自己理解に関する用語の理解を問う設問である。選択肢が八つと多く、「青年期」の重要な概念である「自己実現」「自我意識」「自我同一性」についての基本的理解がなければ解答できないやや難しい設問であった。しかし、類似概念の具体例を比較するという内容は、受験者のあいまいな理解を明確にすることができ、良問である。

問３　「望ましい生き方に対する考え」についての調査結果を示した図（グラフ）を読み取る設問である。「競争型かのんびり型か」「自己主張型か協調型か」という多くの受験者が関心を寄せるテーマであるので、意欲的に取り組めたのではないか。文章量は多いが、選択肢と調査結果のグラフを照らし合わせていけば解答できる平易な設問である。

第２問　「死の存在の意義」について（源流思想）

だれもが避けることのできない「死」について取り上げ、先哲たちの思想から「今を善く生きること」の大切さを考えさせるリード文である。「畢生（ひっせい）」「早逝」などの受験者にとっては難解な語句が使用され、やや硬い印象を与えるが、メッセージ性が感じられ、よく工夫されている。各設問も全体的に基本的な知識や趣旨を問うものがほとんどだが、やや細かい知識や、一人の思想家を網羅的に取り上げるものもあり、幅広い学習と深い理解を促す問題となった。全体としては、標準的な難易度である。

問１　$\boxed{4}$ は、プラトンの著書を答えさせる問題だが、①と④が二つともプラトンの著書で、迷った受験者が多かったと思われる。プラトンの著書の内容については教科書にも記述はなく難しい設問である。$\boxed{5}$ は、孔子の理想人物像から、正解を導き出せるため、平易な設問である。

問２　孔子と老子の「道」の違いを問う設問である。よく扱う内容であり、他の選択肢は別の人物の思想だと分かるので、迷うことの少ない平易な設問である。

問３　プラトンの説く「イデア論」「魂の三分説」「理想国家」についての正しい理解が求められる設問である。特に「イデア論」についての理解があれば、②を選択できる標準的な設問であるが、表面的な学習だけでは正解を導くことは難しい。プラトンの思想の理解度を総合的に測ることのできる良問である。

問４　イスラームの宗教的義務行為である「五行」についての理解を問うものであるが、基本

的な知識があれば解答できる平易な設問である。イスラームについては、今後一層の理解が求められるので、「六信五行」の知識だけにとどまらず、信仰の本質の理解を促すような問題を期待したい。また、表記方法であるが、「イスラーム教」ではなく、より正確に「イスラーム」で統一してはどうか。

問５　イエスの思想を問う設問である。イエスの説いた「神の国」は目に見えるものではなく精神的なものであることは、複数の教科書に記述があるので、受験者は迷わず選択できたと思われる。平易な設問である。

問６　ブッダの思想を問う設問である。「四諦」「四法印」「縁起説」を、ウパニシャッド哲学との違いを含めて、表面的な理解では正解できない、やや難易度の高い問題である。思想内容をしっかりと学習してきた受験者には解きごたえのある良問である。

問７　「死」についての様々な思想家の考えを問う設問である。荘子、ヴァルダマーナ、エピクロスの思想の特徴がそれぞれ問題文に記述されているので、地道に学習した受験者であれば正解を導くことができる。標準的な難易度の設問である。

問８　リード文全体の内容把握が求められる設問である。リード文を丁寧に読めば③を選ぶことができる平易な設問である。

第３問　「他者への善行」について（日本の思想）

先人たちの思想を時系列に取り上げ、他者への善行とは何であるかを受験者に考察させようとするリード文である。メッセージ性は伝わってくるが、奈良・鎌倉時代、明治時代以降の記述内容は、受験者にとって善行と絡めてやや理解しにくい一面もあったのではないか。設問に関しては、古代から近代に至るまでバランス良く出題されており、全体的には標準的な難易度である。

問１　13 は、奈良仏教の理念を問う平易な設問である。14 は、選択肢の中で本居宣長にかかわる基本的な用語が「漢意」のみであり、かなり平易な設問である。

問２　聖徳太子の十七条憲法（憲法十七条）の理解を問う設問である。凡夫の概念の理解をもとに思考力を用いて正解を導く設問であり、教科書の表面的な学習では解答できない。標準的な難易度である。

問３　親鸞の悪人正機についての理解を問う設問である。親鸞が言う「善人」「悪人」のかなり正確な理解が求められており、教科書の表面的な学習では全く解答できない難しい設問である。

問４　伊藤仁斎の朱子学者への批判に関する設問である。その批判については教科書に多く記載されておらず、「天人合一」という用語を扱う教科書は少ない。しかし、近世の儒学者の教えについて基本的な理解があれば、解答できる標準的な難易度である。

問５　近世の思想家たちとその考え方の組合せを問う設問である。教科書の記載が多い思想家たちであり、それぞれの人物が説いた基本的な知識があれば、解答できる平易な難易度である。

問６　ロマン（浪漫）主義の意味を問う設問である。選択肢に使われている自然主義も含めてその語感から意味をイメージしやすく標準的な難易度である。

問７　夏目漱石の則天去私について問う設問である。設問文中の「晩年になって求めた」から

「則天去私」を導き出し解答する形式をとっている。②③④が他の思想家の考え方であり、則天去私そのものについての学習が、たとえあいまいであっても解答できる標準的な難易度である。

問８　リード文の趣旨を踏まえて空欄に文章を入れ完成させる設問である。リード文の流れを理解しにくい一面もあり、内容把握の正確さが求められるやや難しい難易度である。

第４問　「『寛容』の概念と実践」について（西洋近代思想）

近代の西洋で形成された「寛容（toleration）」の概念と実践に関するリード文である。時代や地域が網羅的に出題されており、西洋近代思想が幅広く取り上げられている。受験者にとってはリード文の内容が比較的読み取りやすかったのではないか。各設問は全体的に標準的な難易度である。

問１　22 は、ルネサンスという用語から判断すれば平易な設問である。23 は、『愚神礼賛』という著書から判断すれば、正解が導き出せるので平易である。

問２　ボッカチオの『デカメロン』の一説を引用した読み取りの設問である。与えられた資料文の内容は読み取りやすく、丁寧に読めば正解できる平易な設問である。

問３　ルターの「信仰義認説」「聖書中心主義」に関する基本的な設問である。それぞれの選択肢を丁寧に読み解けば、正解が導き出せるので平易である。

問４　モンテーニュの思想に関する設問である。懐疑主義をとるモンテーニュの「ク＝セ＝ジュ」と結び付けることができれば、正解が導き出せる。標準的な難易度の設問である。ただし、リード文にある「ユグノー戦争」という用語に困惑した受験者が多かったのではないか。

問５　スピノザの思想に関する設問である。スピノザに関する教科書の記述も少なく、「永遠の相のもとに」という表記のない教科書もある。受験者にとれば、やや難解な設問であった。ただし、正解以外の選択肢を見れば、明らかにスピノザではないことが分かり、正解が導き出せる。

問６　ロックの寛容思想に関する設問である。ロックの寛容論に関する教科書の記述は少ないが、リード文の下線部前後の記述にロックの思想的立場が詳しく説明されており、各選択肢を丁寧に読めば正解できる平易な設問である。

問７　ルソーの社会契約説に関する設問である。 C に「平等」「自由」のいずれを入れればよいか困惑した受験者が多かったのではないか。難易度の高い設問である。問題文にもう一工夫が欲しかった。

問８　リード文の内容把握をもとに思考力を問う設問であり、各選択肢を丁寧に読み解けば、正解が導き出せるので平易である。

第５問　「友情・公平・連帯」について（現代の諸課題と倫理）

「友情・公平・連帯」という三つのテーマで、会話文形式のリード文を用い、工夫された問題である。高校生二人の会話の中に、現代の諸課題も盛り込み、受験者に対してメッセージ性が高く、現代の諸課題について考えさせるリード文である。各設問は全体的に平易である。

問１　社会主義思想に関する設問である。オーウェン、サン＝シモン、フーリエ、ウェッブ（ウェブ）夫妻については教科書の記述も少ない。また、キーワードに当たる用語も少なく、

多くの受験者が判断に窮したと思われる。選択肢も八つと多く、やや難解な設問である。

問２　サルトルの「アンガージュマン」に関する設問である。「アンガージュマン」を確実に理解していれば、正解を導き出せる標準的な難易度の設問である。

問３　情報社会に関する設問である。本年度の本試験では唯一の「適当でないもの」を選ぶ設問であるが、倫理的知識がなくても解ける平易な設問である。

問４　図（グラフ）の読み取りに関する設問である。選択肢の文章がそれぞれどの凡例をさしているのかを判断する必要があり、解答するのに時間のかかる設問である。難易度としては、平易な設問である。

問５　資料文の読み取りに関する設問である。各選択肢を、資料文と照らし合わせながら正誤を判断する読解力が必要であるが、丁寧に読み解けば正解が導き出せる比較的平易な設問である。

問６　センの思想に関する設問である。アファーマティブ＝アクション（積極的差別是正措置）と結び付けられれば、平易な設問である。「倫理」の設問としてもう一工夫が欲しかった。

問７　リード文にある高校生の発言内容に関する設問である。難易度としては、平易な設問である。

３　試験問題の分量・程度等について

問題数については、大問数は５、設問数は34、解答数は37であった。いずれも昨年度と同じで、ほぼ例年どおりであった。分類表からも明らかなように、問題数、配点とも、「概念などの理解を問うもの」が半分強を占めており、「応用力などを問うもの」は昨年度より減少した。

問題の形式は、リード文の空欄にあてはまる語句や文を選択するもの、図（グラフ）の読み取りをするもの、下線部の理解を問うもの、リード文の趣旨を問うものに分かれていた。また、リード文とは違った資料を使って、その趣旨を問う設問は昨年度よりも減少した。その資料を含めリード文などに関して、全体的には受験者にとって内容把握しやすいものが多く、難易度は標準的であった。本年度に強く見られる特徴としては、組合せ問題の形式が昨年度より倍増したこと、３行以上の選択肢や問題文からなる設問数が５問から13問へとかなり増加したことにより全体的に長文化した。もし来年度以降、この傾向が一層強くなる場合には、60分での問題としてやや不適当な分量になるのではないか。しかしながら、本年度についてはリード文なども含め全体的に試験時間内で十分に解答できる適切な分量と内容であると評価する。

それぞれの大問は、多くの教科書で採られている章立て順での出題であり、全般的に受験者に幅広い学習を求め、基礎的・標準的な設問を中心とした適切な出題であった。そして従来と同様に、受験者になじみのない資料や語句から思考させる設問もあり、知識量に加えて深い思考や判断を求めるような工夫もなされていた。一方で、そうした傾向が強まると、基本的な資料学習がおろそかになる心配もあるので、基本的な思想家の著作を引用することも続けていただきたい。そういった意味で、今後も学習の成果を試すことができる資料の活用を引き続き検討していただきたい。

4　試験問題の表現・形式等について

試験問題の形式や配点については、以下の表に示したとおりである。昨年度と比べて、用語や人名等の知識を問うものや思考力、判断力、応用力を問うものが減り、基礎的・基本的な概念を問うものが増えた。全体的にバランスがとれており、各設問についても受験者が十分に理解できる適切な表現であった。

	主に基礎的・基本的な用語や人名等についての知識を問うもの	主に基礎的・基本的な概念などについての理解を問うもの	主に総合的な思考力、判断力、応用力を問うもの
本試験		第１問　問２（３点）	第１問　問１（２点） 問３（３点）
	第２問　問１（４点）	第２問　問２（３点） 問３（３点） 問４（３点） 問５（２点） 問６（３点） 問７（３点）	第２問　問８（３点）
	第３問　問１（４点）	第３問　問３（３点） 問４（３点） 問５（３点） 問６（３点） 問７（２点）	第３問　問２（３点） 問８（３点）
	第４問　問１（４点）	第４問　問３（２点） 問４（３点） 問５（３点） 問６（３点） 問７（３点）	第４問　問２（３点） 問８（３点）
		第５問　問１（３点） 問２（２点） 問３（３点）	第５問　問４（３点） 問５（３点） 問６（３点） 問７（３点）
計	第１問～第５問　12点	第１問～第５問　56点	第１問～第５問　32点

5　要　　約（総括的な評価）

リード文及びすべての設問について逐一検討してきた。個々の設問に対する評価は前述のとおりであるが、出題方法、配点については、全体的にバランス良く出題されていた。

各リード文及び資料文は、例年以上に倫理的示唆に富む意義深い内容となっており、「倫理」を学んで来た受験者を大いに啓発するものであり高く評価できる。リード文においては、昨年度に引

き続き第５問において会話文が採用された。リード文すべてが説明文のみにならないような工夫が感じられた。資料文では、イグナティエフ『ニーズ・オブ・ストレンジャーズ』のように教科書では扱わない人物の著作を取り上げ、個人の社会（政治）とかかわる要素について読み取らせたり、「倫理」の授業ではあまり扱わないボッカチオ『デカメロン』から一神教の在り方を考えさせたりと、興味深く、かつ受験者の視野を広げるような工夫が感じられた。また、資料文ではないが、受験者が日々学習していく中で目にするような原典を使っての出題もあり、受験者の理解の深化をより一層促すものであったと評価する。

設問については、先哲の思想を現代に生きる人間の倫理的な課題とのかかわりの中で、受験者の日常に置き換えて考えさせたり、基本的な知識や概念の理解を問うものや思考力、判断力、応用力を問うものなど全体によく工夫されていた。例年と比べて、難易度の高いキーワードを中心とした出題であったが、選択肢に配慮が見られ、地道に学習をした受験者にとっては、正解が選びやすくなっていたと感じる。昨年度と同様、思考力、読解力など総合的な力を問うことを重視した傾向が見られ、難易度は全体として標準的であった。今後も単純に知識や概念を問う設問ではなく、日常生活に関連し、受験者の世界観、人生観などを考えさせることに結び付くような出題を意図していただきたい。

高等学校学習指導要領との関連においては、各分野からおおむねバランス良く出題されており適切であったと言えよう。その中で高等学校学習指導要領の内容「⑵ウ　現代の諸課題と倫理」にかかわる第５問について、同じ公民科の「現代社会」や「政治・経済」との共通性が強い分野だが、昨年度に比べ「倫理」の科目の特性を生かした出題となっており改善されていた。

教科書との関連においては、一部でその内容を超えるような設問が見られた。受験者のそれまでの学習の成果が反映されるような出題をお願いしたい。

総じて言えば、本年度の「倫理」の出題は、高等学校学習指導要領の内容に適合しており、基本的な知識に基づく理解や応用力についてバランス良く問われており妥当なものであった。センター試験は単に学力評価だけではなく、高等学校での「倫理」の指導のあり方を方向付ける重要な役割も担っている。このようなことを考慮していただき、今後も「倫理」の目標である、「良識ある公民として必要な能力と態度の育成」に資するような問題作成に取り組んでいただきたい。